

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月3日現在

機関番号：10102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820004

研究課題名（和文）近世領主・政治思想研究の深化のために

研究課題名（英文） For enhancement of a modern feudal lord and political-ideas research

研究代表者

小川 和也 (OGAWA KAZUNARI)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90509035

研究成果の概要（和文）：本研究には2つの柱がある。①大老・堀田正俊の政治思想研究。②「御家」の思想と民政思想の研究である。研究成果は以下のとおりである。①に関して、一橋大学附属図書館所蔵の堀田家文書のうち、朝鮮通信使に関する史料を使い『日韓相互認識』（第5号、2012）に論文「天和度朝鮮通信使と大老・堀田正俊の「筆談唱和」」を発表し、東アジアにおける近世日本の儒学、領主思想の一端を明らかにした。②に関しては、昨年10月に群馬県在住の秋山景山の子孫・秋山綽家の原文書を悉皆調査し、その史料をもとに、『書物・出版と社会変容』（第12号、2012）に「越後長岡藩儒・秋山景山の『教育談』について」を発表し、近世武士教育のあり方を考察した。

研究成果の概要（英文）：There are two pillars in this research.①Political-ideas research of chief minister (tairou) and Masatoshi Hotta.②It is research of the thought of "Oie (daimyo family)", and civil administration thought. The result of research is as follows. ① "hitsudan shouwa" of "tenna degree delegation from the Korean Yi dynasty, and a chief minister and Masatoshi Hotta was announced "tonikkan sougoninshiki" both Japan-South Korea recognition" (No. 5, 2012) ②complete enumeration of the script of the posterity and the Akiyama Yutaka document of Akiyama Keizan living in Gumma was carried out in October, "kyouikudan" of the Echigo Nagaoka hanju and Akiyama Kageyama" was announced to "Syomotsu syupan to shakaihenyou" (No. 12, 2012) based on the historical records, and the state of modern samurai education was considered.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|------------|----------|------------|
| 2011年度 | 1,300,000円 | 390,000円 | 1,690,000円 |
| 2012年度 | 1,100,000円 | 330,000円 | 1,430,000円 |
| 総計 | 2,400,000円 | 720,000円 | 3,120,000円 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近世史・日本政治思想史

1. 研究開始当初の背景

近世思想史における領主思想研究は、若尾政希の『「太平記読み」の時代』を嚆矢とす

る。それまでは、丸山真男の『日本政治思想史研究』（1952）以来、80年代半ばまでの長きにわたって伊藤仁斎や荻生徂徠など著名

な儒学者のテキスト分析が主流であり、しばしばそれを「政治思想研究」と称してきた。だが、「政治思想」という以上、近世国家権力・支配者である領主・武士の意識・思想を明らかにする必要がある。若尾の研究は、近世前期の武士の政治常識が儒学ではなく軍学にあったことを指摘した点で画期的である。しかし、近世中期以降の儒学の受容、殊に藩校を拠点とする儒学の普及はどのように説明できるのだろうか。深谷克己の90年後半から現在にいたる一連の明君・明君録研究は、大名という一人の人格に、「仁政」という東アジアに普遍的な儒学理念が仮託されていることを指摘した重要な研究である。軍学と儒学の関係や如何。近世領主思想研究はようやく緒についたのである。

申請者は越後長岡藩をフィールドとして、拙著『牧民の思想』『文武の藩儒者 秋山景山』、および歴研大会報告などで、これまで藩学と藩政（改革）の関係を探ってきた。その過程で、武士（藩士）たちが学問をするのは、大名家という「御家」のためであり、儒学に関心をもつのは、民衆（領民）をいかに統治すべきか、治者意識をもち、国家有用の人材として主体形成をなしとげるためであることがわかった。つまり、儒学は民政分野と密接な関係にある。武士にとっての学問、あるいは、儒学とは何かという謎を解くためには、民衆（領民）と領主・武士との関係性を明らかにする必要があることを痛感した。それはとりもなおさず、幕藩体制の「国家」性の全貌を捉え、近世の政治思想史全体を見直すことにつながるはずである。

2. 研究の目的

歴史学の基礎は史料にある。だが、これまでの近世思想史研究は、すでに活字化された儒学思想家の著作に依拠して描かれてきた。著作集が刊行・整備されている思想家が研究対象の中心となり史料調査・フィールドワークは等閑にされてきたのである。しかし、近世領主・武士の意識・思想研究は領民統治と不可分であり、それは土地に根ざしたものである。ゆえに、史料調査・フィールドワークを欠くことはできない。つまり、一にも二にも、領主・武士の思想研究は領地に根ざした史料の掘り起こしにかかっている。申請者はこれまで長岡市域を中心に史料調査・フィールドワークを行い、その成果を前掲の拙著や後掲の拙稿にまとめてきた。だが、なお、互尊文庫・文書資料室の榎家文書・相沢家文書など調査すべき余地が残されている。また、一個の事例のみで、木をみて、森をみず、という通弊に陥ってはならず、長岡藩の領主・武士思想を近世国家・社会全体に位置づけるため、他藩の事例を比較検討すべきである。

現在、岡山藩・尾張藩・松代藩・佐賀藩・加賀藩・熊本藩などを対象とした共同研究・研究会が発足している。各研究会への参加、および、各藩の史料が所蔵されている文書館、マイクロフィルムなど史料調査をし、近世の政治思想の全体像を描きたい。

3. 研究の方法

現在、藩研究が近世史の一つの潮流となっている。60年代～80年代にかけての藩研究は幕藩制国家論と歩調をとともにした支配・権力論であった。一方、現在の藩研究の画期性は、領民を藩の構成要素としてみなす点にある。その結果、藩研究における文化・社会史の分野の研究が盛んになり、百花繚乱ともいえるべき活況を呈している。しかし、藩は単なる共同体ではなく、その中心には大名家が君臨しており、「国家」権力性をもつところに最大の特徴がある。その「国家」権力性が顕著に表れるのが体制の危機に直面した改革期である。いったい藩領主層はいかにこの「国家」を再編しようとしたのか。改革期の統治思想を明らかにすることで、藩研究の総合化を目指したい。

本研究は明君録を始め、領主が書き記した書物や藩儒者の著作・上書、大名家の編纂物など、徹底的に領主層の思想にこだわりたい。本来、戦闘集団である武士たちの主従制の論理と、民衆統治の論理＝儒学理念、いわば「武」と「文」の関係はいかなるものであったのか。近世武士の「文武両道」は歴史常識であるが、その内容、あるいは、両者の関係を本格的に問うた研究はなかった。本研究により新たな近世領主像が浮かび上がるはずである。

本研究の画期性は、領民を統治する為政者の意識・政治思想を明らかにするものである。もとより、暴力的・強圧的な政治支配は長くつづかず、被治者・被支配者の一定の合意が必要である。たとえば、明君録には民衆の意識が反映している。支配者と被支配者の関係性を探ることが本研究の重要なテーマであり、単に領主層の思想のみならず、領主・民衆・儒者の三者からなる総合的な政治思想史研究を目指す。

以下、研究の柱を(1)(2)(3)として、三項目示す。

(1)大老・堀田正俊の政治思想研究。正俊が指揮した、綱吉政権下での17世紀末の幕政改革「天和の治」は幕藩体制への儒学理念の浸透の画期とされている。実際、「民は国之本」という民衆統治・儒学理念を幕令として布達したのは正俊である。しかし、正俊がいかにして「民は国之本」という儒学理念を受容し、幕政の中心においたのか、その過程は明らかにされていない。また、正俊は老中・

大老という幕府の要職にありながら、他方、藩主・大名としての顔をもつ。幕政と藩政との関係はいかなるものだろうか。(1)においては、堀田正俊の著作・読書歴や朝鮮通信使との交流などから、近世前期の幕藩制国家の政治思想の一端を明らかにする。

(2)「御家」の思想と民政思想の研究。武士の政治性は、大名家に組み込まれ、「御家」の一員としての帰属意識を前提とする。近世成立期より、戦国以来の戦闘集団としての大名家は再編されてゆくが、近世中期以降、藩政改革のなかで、改めて「御家」の由緒などが編纂され、文字化されることにより、「御家」意識は即自的なものから対自的なものに転換し、「伝統」が立ち帰るべき「古法」として意識される。近世中後期の改革はほぼ例外なく「古法」復帰をスローガンとする。他方、藩という「国家」に含まれる領民を統治する民政分野においては、「民は国之本」という政治理念を中心とした儒学思想が、近世初期よりも一層、浸透する。簡単にいえば、「御家」の思想とは武士団の思想である。一方、儒学は藩という「国家」に含まれる民政統治・行政官としての思想である。では、両者の関係はいかなるものだろうか。この点を明らかにしたい。

(3)戊辰戦争における越後長岡藩の武装中立、および、家老・河井継之助の思想研究。これまで、長岡藩の武装中立は、幕末・嘉永期以降のごく短いスパンのなかで捉えられてきた。その視点はパワーポリティクスである。だが、それではなぜ長岡藩が武装中立に至ったのか、その思想的背景と政治過程を明らかにすることができない。幕末期の長岡藩の思想と行動を探るには、その中心人物である家老・河井継之助の思想と行動を明らかにする必要がある。(3)を明らかにすることにより、新たな明治維新史像を呈示したい。

4. 研究成果

研究活動実績として、主要な史料調査を列挙する。①千葉県佐倉市日産厚生会佐倉厚生園によるマイクロフィルム「堀田家文書」238リールの活用、および、佐倉市の堀田正俊子孫の堀田正典家文書の調査をおこなった。

②新潟県長岡市・長岡市立中央図書館、および、文書資料室の史料を調査した。とくに、秋山家文書・榎家文書・相沢家文書・横山家文書、また、寄託史料の佐藤家文書の調査・閲覧・撮影を行った。

③群馬県前橋市の秋山家文書の資料調査。これは、長岡藩儒者・秋山景山のご子孫の家の文書群である。

その他の活動として、加賀藩ネットワーク、尾張藩社会研究会、岡山藩研究会などの研究会に参加。また、各藩・大名家の研究者との

意見交換、研究会への出席。

以上のような、研究調査活動をつうじて、どのような研究成果があったのかを報告したい。

論文として、

(1)大老・堀田正俊の政治思想研究に関して、一橋大学附属図書館所蔵の堀田家文書のうち、朝鮮通信使に関する史料を使い『日韓相互認識』(第5号、2012)に論文「天和度朝鮮通信使と大老・堀田正俊の「筆談唱和」」を發表し、東アジアにおける近世日本の儒学、領主思想の一端を明らかにした。

(2)群馬県在住の秋山景山の子孫・秋山綽家の原文書を悉皆調査し、その史料をもとに、『書物・出版と社会変容』(第12号、2012)に「越後長岡藩儒・秋山景山の『教育談』について」を發表し、近世武士教育のあり方を考察した。また、翻刻も行った。

(3)長岡市での史料調査に基づいて、『歴史評論』の特集「「御家」の思想—大名家の自己意識」に「「御家」の思想と藩政改革—越後長岡藩牧野家の「常在戦場」をめぐる」(No. 754、2013)を寄稿した。これは、太平洋戦争の海軍司令官であった、山本五十六の座右の銘「常在戦場」から説き起こし、戦国以来の伝統とされる、家訓が18世紀半ばに作為されたものであったことを明らかにした論考である。

研究発表として

(1)北海道歴史研究者協議会の例会で、「近世政治思想と明君録—儒教と仁政をめぐる将軍と大老の相克—」と題して報告をおこなった(2012年9月22日、北海道教育大学駅前サテライト)。これは、天和の治の主導者である、徳川5代将軍・綱吉と、大老・堀田正俊の確執が儒教と仁政をめぐるものであったことを明らかにしたものである。

(2)北海道教育大学史学会大会において、「近世政治思想研究の試み—書物の成立と展開から考える—」と題して報告をおこなった。(2011年7月17日、北海道教育大学釧路校)これは、『牧民忠告』という漢籍が日本に輸入され、翻刻・訳注されることを通じて、近世日本の政治思想を明らかにする試みである。

(3)異文化間交流にみる近世日本研究会において、「天和度朝鮮通信使と大老・堀田正俊の「筆談唱和」—東アジアの儒学と近世日本の領主思想—」と題して報告をおこなった(2011年12月28日、一橋大学マーキュリータワー)。これは、堀田正俊の儒学がいかに東アジア世界に開かれていたのかを示す報告である。

なお、助成期間には間に合わなかったが、本助成による研究成果に基づき、5代将軍・徳川綱吉と大老・堀田正俊の確執を中心とした『天和の治・儒学殺人事件』(仮題)を今秋

(2013年秋)に講談社より刊行することが決定している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 小川和也、「御家」の思想と藩政改革—越後長岡藩牧野家の「常在戦場」をめぐる、歴史評論、査読無、No.754、2013、pp. 5~19
- ② 小川和也、越後長岡藩儒・秋山景山の『教育談』について—近世武士教育の一断面—、書物・出版と社会変容、査読無、12号、2012、pp. 205~222、<http://hdl.handle.net/10086/22232>
- ③ 小川和也、天和度朝鮮通信使と大老・堀田正俊の「筆談唱和」—東アジアにおける儒学と近世領主思想—、日韓相互認識、査読有、5号、2012、pp. 1~53
<http://hdl.handle.net/10086/22237>

[学会発表] (計3件)

- ① 小川和也、近世政治思想と明君録—儒教と仁政をめぐる将軍と大老の相克—、北海道歴史研究者協議会、2012年9月22日、北海道教育大学駅前サテライト
- ② 小川和也、近世政治思想研究の試み—書物の成立と展開から考える—、北海道教育大学史学会大会、2011年7月17日、北海道教育大学釧路校
- ③ 小川和也、天和度朝鮮通信使と大老・堀田正俊の「筆談唱和」—東アジアの儒学と近世日本の領主思想—、異文化間交流にみる近世日本研究会、2011年12月28日、一橋大学マーキュリータワー

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 和也 (OGAWA KAZUNARI)
北海道教育大学教育学部・准教授
研究者番号：90509035

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし